

朱絃舎浜子

長谷川時雨

青空文庫

木橋もくきょうの相生橋あいおいばしに潮がさしてくると、座敷ごと浮きあがって見えて、この家だけが、新佃島しんせんま全体でもあるような感じに、庭の芝草までが青んで生々してくる、大川口おおかわぐちの水ぎわに近い家の初夏だった。

「ここが好えいぞ、いや、敷しきものはいらん、いらん。」

広い室内きどこの隅すみの方へ、背後うしろに三角さんかくの空くうを残して、ドカリと、傍わの前に安坐あんざを組んだのは、箏ことの、京極きよごく流を創造した鈴木鼓村こそんだった。

「此処は反響が好い、素晴しく好いね。」

も一度立つて、廻り椽の障子も、次の間への襖も、丸窓の障子もみんな明けて来た。

「ええね、ええね、なんか嬉しい気がするぞ、今日は良う弾けるかも知れんなあ。あれ、あんなに潮が高くなつた。わしや、巖いづく島しまに行つてること思出しています。ホ！」

また大きな体を、椽のさきまで運んでいった。

「ほう、ほう、見る間に、中洲の葭がかくれた。あれ、庭の池で小禽なか鳴いているわい。」

「翡翠かわせみでしよう。」

わたしは早く「橘たちばな媛ひめ」が聴きたかつた。

「まあ、すぐじゃ、すぐじゃ。」

鼓村氏は閉口した時にする、頭の尖さきの方より、頸くびすじの方が太いのを縮めて、それが、わざと押込みでもするかのように、広い額に手をあてながら座についた。外で演奏する時には、ゆったりした王朝式の服装と、被かぶりものであるが、今日のように平服のときは、便べんべん々たる太鼓腹の下の方に、裾すその広がらない無地の木綿もめんのような袴をつけている。

寛らくらく々と組んだ安坐の上に、私たちの稽古琴けいこことを乗せて、ばらんと十三本の絃いとを解いた。

「山の手におると、乾かわくような気がすると、八千代やちよさんはいうているなあ。此家ここへくると、ジュウつと、水が滲しみわたるようじゃ

というてたが、わしもそう思います。」

「岡田八千代さんは、水がすきで、御飯へもかけて食べますもの、夏は氷で冷たくしたのを。」

「や、そか？」

鼓村師の、大きな体と、ひろびろした頬をもつ顔に似合わない、小さいな眼が、箏の上に顔ごとつきだされた。

「水は好いもんじやなあ、麴町の家の崖に、山吹が良う咲いているが、下に水があると好えのじやが——」

椽に栗山桶がおいてあつて、御簾のかかっている家の話に移つていつた。

そういううちにも大きな掌は、むずと、十三本の絃をいちどき

に握つて、ギユンと音をさせて締めあげた。

それから一絃ずつ、右の片手の、親指と人差指に唾つばをつけては絃をくぐらせて、しつかり止める始末をしてゆくのだった。その扱いかたの見事さに、うっかり見とれていると、

「あの、何じやね、話が先刻さつき飛んでしまったのじゃけど、妙な、不思議な女子おなごで——」

と、指を湿らせる合間あいまに、水をほめる前に、先刻話しかけたつづきを、思出したようにいうのだった。

「わしも、いろんな弟子でしをもつたが、その女子おなごほどの名手は、実際会ったことがないほどで、それが、こつちから訊きかなければ何も知らんふりをしているが、なんでも弾けるのでなあ、忘れてし

まうと、わしのものを、わしが教えてもらうので——いや、ほんのこつちや。」

鼓村師は、自分の作曲したもので、自分で忘れた部分は、爪まおと音をとめて、絃いとの上に手を伏せたまま唄うたっていることがある。

感興が横おういつ溢すれば、十三弦からはみ出してしまふほどの、無碍むげの芸術境に遊ぶ人だつた。

「では、河内かわちの国、富田林とんだばやしの、石いその上露子かみつゆこさんとどつちが——」

かつて、雑誌『明星みょうじょう』の五人の女詩人、鳳晶子おおとりあきこ、山川登美子、玉野花子、茅野雅子ちのまさこと並んで秀麗うつくしい女ひとであつて、玉たまご琴との名手と聞いていた人の名をいつて見た。

ゆきずりの、我わがこいたばし小板橋しらくしらくと、

一重ひとえのうばら、いづくより流れかよりし、君まつと、ふみし

夕べにいひ知らず、しみて匂ひき——

と、私は口のうちに、石いその上露子かみの詩をうたつて見ていた。

それを、大きな掌てのひらは、遠くからおさえるように動かされて、

「あれは美人じゃからなあ——石いしかわ河の夕千鳥には、彼女の趣味

から来る風情ふぜいが添うが——わしが、今感心しておる女子ひとは、箏ことの

こととなると、横浜から、箏を抱いてくる。小さいな体からだをして。」

ちいさな、というのに力を入れて、丁度いと絃の締まった箏を、軽か

々るがると坐つたまま、ぐるりと筆ふんまわし規いのように振りかえた便次ついでに、

抱かかえるようにして見せた。

「こんなようにしてじゃぞ。」

私の顔は笑っていたに違いない。鼓村師は割合、細心なところもあるので、箏を振り廻したのを、乱暴したように笑っているのだとでも思いもしたように、豪放のような、照れたような笑いに、また首をちぢめてまぎらわした。

水の清い、石川河の磧かわらに近く庵室あんしつをしつらえさせて、昔物語の姫君のように、下げ髪かみに几帳きちょうを立て、そこに冥想めいそうし、読書するという富家ふうかの女ひとは、石の上露子とも石河の夕千鳥とも名乗つて、一人静かに箏を掻かきならず上手じょうずの名があつた。それからまた、横浜から箏を持って習まなびにゆくという女ひとにもわたしには心あたりがあるので、思わず破顔したのだつた。

「共通なところがあるのでしょ。」

と私は言った。それは、たしかに、二女に共通したものがあるのだった。鼓村師には解げせなかつた。安坐の上に乗せた箏じゆに、柱じゆをたてながら、

「その小ちいっこい女ひとは、几帳面きちようめんで几帳面きちようめんで、譜ひらをとるのに、これれっぽちの間違ちがいもない。ありやどうしたことじやろうかね。

箏しゆの音ねはまた、それとは違ちがうて、渺びようびよう々々としておるので——真まの、玉琴たまごというのはああした音色ねいろと、余韻ねがとでなければ——」

だが、その玉琴たまごの名手なまてが、なんとしたことか、正午せいごというところ、何処どこでもお弁当べんとうを食たべだすと、溜息ためいきのように、

「それがなあ、汽車くるまのなかででも——汽車くるまじやというたところ

が四十分そこそこの横浜と東京の間で、それも買って食べるのではないのだから、ちやんと、弁当箱を出すのだからわしの方が恥かしくって、顔見られるようで愁つらかったが、すまあしてやつと見る見とるとわしも腹すが空くが、横浜までは何も売ってはおらんので

——
鼓村師は、大きな口と、小さな眼で笑った。

そう言ううちに膝ひざの上で、箏の調子はあっていた。大きな、厚い、角かくづめ爪づめが指はに嵌はめられると、身づくろいして首が下げられた。私も、ずっと離れて、聴くにほどよい席につき、お辞儀をする
と、膝の上に手を重ねた。

渡り廊の方に、聴きに寄っているものたちがいる様子で、父は

向うの居間いままで聴きいている気配けいばいだった。ふすま襖の横には妹たちが来た。

莊重なる音色、これが箏かと思われるほど、他の流とは異なる

大きなかな、深みのある、そして幅広い弾奏だった。十三弦は暴

風雨らしを招よんで、相模さがみの海に荒ぶる、洋うみのうなりと、風雨の雄叫おたけ

びを目の前に耳にするのであった。切々たる哀音は、尊みことを守つて

海神かいじんに身を贄にえと捧ささぐる乙おとたち橘なひめ媛の思おもいを伝えるのだった。

唄い終つてしまつてからも、最後の音が残のこされていた。心ゆく

ばかりに弾じたのであろう心足たらいに、暫時しばしの余韻いとしをもつて絃いとの

上から手はおろされた。

恍惚こうこつとした聴者たちは息をつくものもなかった。薄うすくにじむ

涙を、そつと拭ふきとると、鼻をおさえているものもあつた。少しばら

時く口をきくものもないでいると、鼓村師も満足げに、水の面おもの方へ眼をやつていた。

五月の潮の、ふくれきつた水面は、小松の枝振りの面白い、波除よけの土手に邪魔もされず、白帆しらほをかけた押送おしおくり船ふねが、すぐ眼の前を櫓拍ろ子いさましく通つてゆくのが見える。

「ああ、よかつた。」

誰いうとなく眩つふやきかわすと、

「あの船も、あつちやから来たんじやね。」

鼓村師は、庭へ出れば、安房上総あわかずさの山脈が、紫青く見えるのを知つていたので、ふと、そんなことを言っている。

曲からうけた感銘に、ほろほろとしている主客を、救つてくれ

たのは、鼓村師の好きな素麵そうめんだった。古くからいる、年とつた女中は、弹奏のあとで、冷たいものを悦ばれるのを知っているの
で、大きな鉢へ蕎麦そばの葉を敷いて、透き通るように洗った素麵を盛
つたのを、そのまま鼓村師の膝の前へ押しつけた。

「これを、みな食べたなら、恥かしいがな。」

そう言いながら、一鉢はすぐになくなってしまった。それと同
時に、

「あなた様の分は、もう一鉢ございます。」

と、代りの、前のよりも大きい鉢が運ばれて来た。

大きな人が、舞妓まいこでもするようにはにかんで、口をつまんで、

スツ、へ、スツ、へ、と中へ笑いながら、その鉢も引きよせたが、

素麵を、するりと咽喉のどにすべり入れると、先刻さつきの、正午おひるのお弁当の話がまたつづけられることになって、

「その女子ひとが断わつていうのには、先生には、誠に濟まないのだが、どんなおりにも、正午おひるの時計と、キッチンとおなじに食べつけているので、そうしないと、お腹なかの具合が悪いというて——何処か悪いところがあるのじやろうが——」

「お腹なかに病気がありますの。」
わたしは誠に手軽く答えた。

「なにしろ、お医者に言われると、ちやんと、もう十年にもなりまずでしょう、家うちにいれば、お午飯ひるは、ビフテキ一皿と、葡萄ぶどうが六顆むっつばかり。お母さんが、ちやんと拵こしらえて、食べる娘ひとは机の上

の時計を見ていて——」

「なんじや、あんた、知つとるのか？ その女子^{ひと}。」

素麵を滝のように口にしたまま、眼を剥いた^むのが、黒い顔に、いかにもびびっくらしたというふうだった。

「ええ。」

お腹^{なか}から押し出てくる笑^えまいを、わたしは呆^{あき}れている、素麵の上にあるその顔にむけた。

「横浜といえば——そうでなくつたつて、あんな人は、まあないでしょう、浜子でなければ——」

「そうじやとも。」

鼓村師は、一飲^{ひとのみこ}込みしてから大きく頷^{うなず}いて、

「あんた友達か？」

今度はわたしが説明する番に廻つて、ええと言つた。

「横浜の家へ着くと、お母さんという人が、御馳走ごちそうをしたのなんのと、わしでも、どうにもならんかった。可愛いんじやね、一人娘のようじやつたが。」

「おばさんは、浜子さんのお友達なら、どんな奉仕もするのです。彼処あそこのうちの台所は、とても立派な、調理用ストーブが並んでいゝるし、井戸は坐つていて酌くめるように、台所の中央まんなかにあるし、料理は赤堀先生の高弟で、洋食は、グラランド・ホテルのクツク長が来ていたから、お婆さんの腕前は一流です。それに、山谷さんやの八や百善おせんは妹の家うちですから——」

江戸えどの味覚は、浅草山谷とどに止めを差すように、会席料理八百善の名は、沽券こけんが高かったのだった。

「浜子さんが、ムツと黙っているの、おばさんが、その代りにニコニコ、ニコニコして、阿亀おかめさんがわらっているように、例いっも笑い顔をしてるでしょう。」

「そうや、そうや。」

鼓村氏は、浜子が体が弱いので、転地ばかりしているから、その時持つてゆくのに具合いの好い、寸づまりで、幅の広い箏を、正し倉院ようそういんの御物ぎよぶつの形かたちを模して造らせた話をした。

「箏の裏板へ大きな扉とびらをつけて、あの開閉で、響ねきや、音色ねいろの具合を見ようという試みね、巧うまくいつてくれればようござんすね。」

あの箏の、裏板のバネを鼓村師が考えていることも、わたしは知っていた。

「あれは、わしも期待しています。わしやあ、日清戦争に琵琶を背負って行って、偉く働らいたり琵琶少尉の名も貰うたりしたが、なんやらそれで徹したものがあつて、京極流も出来上つたが、あの人は、なんであんなに、箏にはいつていつたものかなあ。」

わたしの眼に、ふつと、一文字国俊の刀が見えた。と同時に、横浜の家の、土蔵の二階一ぱいの書籍の集積が思い出された。

わたしが、知りたいものがあるとき、我儘なわたしは、自分で図書館へ行かずに、かくのごときものがほしく候と書いて手紙を出せば、たちどころに、何の中にかくありましたと、それは明

細に、一字一点の落ちもなく奇麗に写してよこしてくれるのが彼女だった。あんまりそれがキチンとしているので、わたしは彼女の芸術が面白くなくなる憂いがありはしないかと、余計な憎まれ口を叩いて、漢方医者やくみだんすの薬味筆筒のように、沢山の引出しがあり、一々、書付けが張りつけてでもあるような頭脳あたまだといったりした。たまには間違えて引出しをあけると、毒薬や、笑い薬なども出て来て楽しいだろうにといった。そんなことも、こと細かに、下書きをした上で、その日の日記帳に書き止められ、しかも彼女の批判がつけられてあるのが、浜子の仕方だった。

しかし、彼女には、彼女らしいユーモアたくが計らまれ、静かに実行にうつされることもあるのだった。言つて見ればある時、年長

者や、年下の者や、とにかく浜子の箏に心酔する、友達であり門弟である女人^{ひと}たちが集められた会食の席で、わたしに、

「おやつちゃん、ニヤアといってごらんさい。」

と、並んでホークをとっている浜子がいった。わたしはなんの遅疑もなく、早速^{さつそく}ニヤアンと彼女の言葉の下にやった。わたしの眼はお皿からはなれてもいないし、四辺^{あたり}の眼なんぞ考えにも入れていなかった。ただ、しかし、可愛らしい小猫の柔^{やさ}しみがなかったのもので、

「まるでドラ猫だ。」

と、呟^{つぶ}やきながら、もいちど、せいぜい小猫らしくやって見た。と、浜子は、下をむいて、クツクツと笑いを噛^かみ殺している。

それがとても嬉しそうなのだ。で、お皿を下げに来た給仕人きゆうじにんの笑い顔を感じて、わたしは卓テーブルの人たちを見ると、みんな、呆れあききつた眼を丸くしてわたしにそそいでいるのだった。

あッはッははは。とわたしは男のように声を出してしまった。

これが計画で御馳走があつたのかと、見破つたからだつた。浜子は、あたしのニヤアンと言うことなど、あたりまえのことで、なんとも思いはしないことは知りきつているのだが、ただ、浜子の友達のなかに、こんなことを、平気でするものがあることを、吃びっくり驚するであろうみんなの前で披露して、呆れあきかたが見たかつたのだ。それが思い通りだったので、楽しかつたのに違いない。お景物けいぶつに、わたしが、それがなんなの？ といった顔をして、呆

れている友達たちの顔を見たことまでが、予期した通りの好結果であつたのだ。

「おかしな人で——」

わたしはそんなことを思出しながら、笑うとなおと、穿き好いからといって、太いふとい、まむしのような下駄げたの鼻緒はなおをこしらえさせて穿はいたり、丸鬚まるまげのシンをぬいて、向う側がくりぬけて見えるような鬚にゆつたりするので、この部屋に来て坐ると、わたしがこつち側からのぞいて、安房上総あわかずさが見えるといったことなど、とりとめもなく言つて、

「お父さんは、信州のちいさがたごおり小 県 郡 の、二百年も連綿としたお庄

屋様の家督とりで、廿五歳の青年お庄屋様は横浜へ飛んで来て、

野惣のそうという生系問屋きいとどんやへはいってしまつたんで、横浜が大きくなり、野沢屋のさわやが大きくなると、総支配人そうしはいにんで店を掴にぎる人になつたのですが——その利きかない気性と、強いものがあるところへ、お母さんは江戸えどっ児こですの。前川まへがわという有名な資産家の、太物問屋ふともものまひらのお嫁よめ御めいになつて、連合つれあひに別れたので、気苦労きくろうのないところへと再嫁さいけして、浜子はまこさんを生んだ時に、女の子おんなこだったらば、琴ことが上手じょうずになるようにと、箏そうをつるした下で産んだのだときいています。お稽古けいこのことで面白いことがあるのです。」

あたしは聴きいているままを、話した。両親の秘蔵ひざうツ子つこには違ちがいないが、母の教えたがるものと、父親の教えたがるものとは、すこしちがつていることや、お母さんは、浜子はまこが小さすぎる生れだ

ちで、弱いのを気にして、運動にもなるからと、踊の稽古をはじめさせたが、次の日、乳母ばあやだけがお供をしていって、帰ってくる
と浜子は、

「踊のおけいこいや厭だから、やめてください。」
と、母親にいった。そんなに気がむかないのなら、また、そのうちに行きたくなくなるまで休ませようと、乳母ばあやを師匠のところへ断わり
にやろうとすると、

「いいえ、好いいの、もうちゃんと来ませんと断わって来ました。」
と、六歳むっつの彼女は言ったものだった。

箏の稽古の方は、箏を父親が好かないので、内ないしよで弟子入り
したのだった。

師匠の大出勾当おおでこうとうは、江戸で名の知れた常磐津ときわづの岸沢文左衛門きしざわもんざえもんの息子こだった。開港地の横浜が日の出の勢いなので、早くから移つて来ていたが、野沢屋の主人あるじの困こいで、栄華をきわめ贅ぜいたく沢いたくをしつくしていた、お蝶さんという権妻ごんさいのひっかかりだったのだが、そんな縁引きえんびがありながら、盲目のこととて、新入門しんもんの弟子の体に触さわつて見たらば、あんまり小さいので、「これでは仕方がない、大きくなつたらまたお出いでなさい。」と断ことわつた。

それを、傍らで見えていた大出勾当の母親は、「なにを馬鹿なことをいうんだ。稽古けいこというものは、教えて見て、弾けるか弾けないかで断ことわりもするが、小さいから大きいからつ

ということはない。大人おとなだつて覚えぬ奴もある。子供だつて、覚えようつて来たものを、手筋も見ないで帰す馬鹿があるかツ。」と、巻舌で息子を罵ののした。その見幕けんまくに、泣き出すかと思つた子は、ちよこちよこといつて箏の前へ坐つたのだつた。

「大出さんは、手ほどのきのお弟子ですけれど、浜子さんには敬意をもつていました。いつか、横浜で、その勾当さんの会があつたとき、箏を抱かかえてゆく浜子さんに附いていつたらば、行くとすぐ、あの人の番にして、誰も彼も謹聴です。箏のお師匠さんのお盲目さんたちが、コチコチに堅くなつて、背中を丸くして聴いていました。ある時、お父さんが、浚さらつてゐる音色ねいろをきいて、待つてくれと、坐り直してから、その後のちは、間まをへだてても、キチンと正

坐して聴いたものだといひます。で、そのお父さんが、何かにつけて、御褒美ごほうびをくださるのに、女の子の、浜子が望むのは、刀なので――」

「刀？　これは妙だ。」

鼓村さんはますます興ありげに聴いている。

「ええ、あの人は、幾振りか持っています。そのなかで、思いがけない、今では、国宝級の国俊も、お父さんが東京から買って来て、御褒美に貰ったものだといひます。」

「面白いなあ。当時の横浜は、金がうなるようにあつたのだと見える。」

「貿易商が、儲もうかってしようがなかったのは、弗ドル相場そうばだったと

いいます。なんにしろ、十六の子に百円の小遣いをもたせて、東京へ遊びによこす——」

「百円？　なんで——」

鼓村さんは信じられない顔つきだ。

「東京へ、とまりに来たことがあるのだそうで、四十日ばかり泊っていたのですが、なにしろ、山谷八百善という派手な家業の家うちではあり、九代目団十郎のおかみさんは、八百善が実家さとになつているといふ親類たちなので、時代は、丁度、明治二十四、五年ごろでしたでしょうから、鹿鳴館ろくめいかん時代の直後ですわねえ。でも、浜子さんはそういつていました。父は、あたしが、小遣いをどんなふうにつかうだろうと思つていたのでつて。」

「何を買ったかなあ、刀？　だが、子供では、他はたが買わせやしなかつたろうが——え、なに、本？」

茶箱に何ばいかの書籍、それを担かつがせて、意気揚々とおちび少女は帰っていったのだ。

「親馬鹿は感心したろうがにえ。」

鼓村さんは自分も感心したように言った。

「島田に結つてたころ、髭ひげが今に生はえてくるでしょ、なんて、か
らかつたけれど——そうそう、こんな話もありましたつけ、佐佐
木信綱のぶつな先生の所へ行って、あたくしの友達の、こういう人を連
れて来ますと言ったとき、その人ならば、思い違いをしたおかし
い話があると、なんでも浜子さんが十五、六の時分ではなかつた

のでしようか、そうそう 錚々たる歌人たちを歌会を開いて招いたときの話で、佐佐木先生も招よばれていったが、どうも、その婦人は、年をとった偉い人なのだろうと出かけてゆくと、立派な家うちで、集まっている人たちも、浜子とじ刀自とは、どんな人かとみんなが堅くなっている、現われたのは、紫の振ふり袖そでを着て豎たて矢やの字に結んだ、小ちつこい小娘だったので、啞あぜん然としてしまったが、その態度は落ちつきはらっていたと——」

あははと、笑いだした鼓村さんは、突然、

「あれ、あれ。」

と、わたしに指差して教えた。家うちのものたちが、土手のはずれの方へ行って、ワイワイ騒いでいるのだった。老父ちちも座敷の前の庭

を横ぎっていった。

「どうしたのですか？」

鼓村さんは立って行って、挨拶あいさつをしながら聴いた。

「いや、家鴨あひるが河へ出て、沖の方へゆくそうで——」

「やあ、じいやさんが船を出した。」

と、言いながら、鼓村さんは庭下駄をつツかけて、老父ちちのあとへ附いていった。

椽えんへ立って見ると、どうやら、河口へ出た家鴨あひるを、通りがかりの小舟が、網を投げかけたので、驚ろいて橋の下を越して、沖へ出ていったものらしかった。

白い大きな鳥が、青い潮にういているのがくつきりと見えてい

る。対岸の商船学校から、オールを揃そろえて短艇ボートを漕こぎ出してくるのが、家鴨とは反対に隅すみ田川だがわの上流の方へむかつてすべ迂まがるように行く。ベカ舟ふねに乗って、コイコイコイコイト、家鴨を呼んでいるじいやに、土手の上で、危いから帰って来いと呼んでいるのを、橋の上の人が、大声で伝えているものも見える。

庭へおりて見ると、小篠こいしぎの芽が、芝にまじって、健すこやかな青さで出ていた。そのかげを赤こがにい小蟹こがにが、横走りに駈かけたり、鋏はさみで草を摘んで食べている。

浜子さんの噂をあんなりしたが、あれで、鼓村さんに浜子という人の並々でない気性がわかってもらえたかしらと、かいなでの弟子と見てもらいたくない気で、よけいなおしゃべりをしたのが、

軽い憂鬱ゆううつでもあつた。

彼女の家うちは、横浜の、太田初音町はつねちようの高台にあつて、彼女の書齋しゆさいの二階からも、下の広間の椽側ぐらたへからも、関内かんないのいらかを越して、海が遠くまで見えるのを思つたりしながら、わたしは、蟹を下駄げたのさきでおどろかしていた。

二

新富町しんとみちようの新富座の芝居茶屋おちややに——と、いつても、震災後の今日こんにちでは、何処どこのことか解りようがない。

銀座から行つて、歌舞伎座の次の橋を越して、も一ツさきに築つ

地橋きしばしという電車の止まるところがある。

この、築地橋の下を流れる川の兩岸は、どつちから行つても佃つくだじま島へむかう、明石町河岸へ出た。浜方はまかたの魚場いさば気分と、新設された外人居留地という、特種の部落を控えて、築地橋きよは畔んの兩岸は、三味線の響き、粹いきな家が並んでいた。夕汐ゆうしおの高い、靄もやのしめつぽい宵よいなど、どつち河岸を通つても、どの家の二階の灯も艶なまめかしく、川水に照りそい流れていた。咽むせぶような闇やみのなかを、ギイと櫓ろの音がしたりして、道路おうちらいより高いかと思うような水の上を、金髪娘を乗せたボートが權かをあげて、水を断きつてゆくのだつた。

その、橋の向う角の一角を、東京の者は島原しまばらといった。そこ

にある新富座という劇場のことも、島原という代名詞でいった。

あたくしが幽かすかに覚えていたのだから、明治も中期のことであつたろうが、この劇場と、芝居茶屋の前に、道路に桜が植えられ、燈籠とうろうがたつたほどこの一角は、緋ひもうせんと、花暖簾はなのれんと、役者の紋ぢらしの提燈ちようちんとの世界であつた。尤もつとも、演劇改良の趣意で建設当時には、花暖簾も提燈もやめさせ、板の看板だけにしたというが――

芝居の裏通りや附近には、有名な役者たちが住み、音曲おんぎよくの方の人たちも、その一角のなかかその近間ちかまにいた。櫓下芸妓やぐらしたげいしやもあるといったふうで、四囲の雰囲気は、すべてが歌舞伎国領土であつた。

新島原という名は、京都で有名な、島原遊廓から来たものであつたろう。あまり短命だったので、知れていないが、明治二年に、あの土地へ遊廓が許されて、新島原が出来かかったのだが、次の年の秋に大暴風雨があつて、なかまんじ中万字という妓楼が吹き倒され、遊女が八人も怪我けがをしたので、遊廓の未完成のまま立退たちきを命じられた。

新富座の前名の守田座は、その島原へ建つた。もともと、遊廓と芝居は離れない因縁をもつていて——歌舞伎の創業時代に遊女が小屋がけをしたことなどをいつていると、それだけでも長くなるが——江戸開府のころ、日本橋区人形町附近の、葎よしの生はえているような土地を埋めたりして、葎原よしわらという廓くるわが出来、住すみよ

吉町しちよう、浪花町なにわちようなどと、出身地の地名をかたどった盛り場となり、その近くへ芝居小屋が建築されたそれが、いわゆる三座と称せられた江戸大劇場しばいの濫觴らんしようで（中村座、市村座、山村座。そのうち山村座は、奥女中江島えしまと、俳優生島新五郎いくしましんごろうのことで取りつぶされた）、堺町さかいちよう、葺屋町ふきやちようにあつた。大火後、遊廓は浅草田圃たんぼへ移され、新吉原となり、芝居だけ元の土地に残つてしたが、ずつと下つて天保てんぽう十三年に、勤儉令しんけんれいを布いた幕府の老中、水野越前守えちぜんのかみが、中央に芝居小屋などのあるのはもつてのほかのこと、御趣意ごすいに反くというわけで、浅草猿若町さるわかちようへ転地させられた。

そのころ、京橋木挽町こびきちようにあつた守田座が、猿若町に立並んで

三座となつたが、この、守田座は、委くわしくいえば、もとから、芝居は四座あつて、守田座だけが別の土地に離れていたので、これも古い名ではあるが、十一代目を継いだ——下しも総うさあたりのお百姓から出て、中村翫右衛門がんえもんと名のつた、あまり上手でない役者が座元の養子になり、その子の十二代目守田勘弥もりたかんやを、子供の時分からその道にぎようつう暁ぎ通うつうするよう^に育てた。

その人が、演劇道に有名な守田勘弥という策士で、明治維新後の情勢を見て、帝都の中心地となる京橋へ劇場進出をもくろ目論んだ。

元来木挽町は、以前の土地ではあるし、木挽町へ劇場を建てようという運動は、それよりも一足さきに、これもおなじ土地にあつたかわらざきぎざ河原崎座がうねめ采女がはら原へ新築許可を願ひ出していた。これはたぶん、

目下いまの歌舞伎座あたの辺であつたろう。——河原崎座主、河原崎権ごん之助すけは、九世団十郎が、市川宗家そうけに復歸しない、養子にいつていた時の名——現いま今でもあのあたりは、歌舞伎座、東京劇場、新橋演舞場が鼎てい立りつしている。

守田座移転は明治四年だというが、新富町新富座という、堂々たるものになつたのは、九年霜月しもつき末すえに焼けてから再築し、十一年春に、西南戦争を上演して大入おおいりをとつてからだ。

明治十年の西南戦争は、明治政府の功臣たちの間の争いであり、兵の組織も新式になつてからであるから、薩南さつなんの地であつたといえ、朝野ちようやを挙げて関心をもつていた。西郷隆盛さいごうたかもりは、江戸人が恩人として尊敬し、愛していた大人物だつた。その人の最

後を知ろうとするものが殺到したのだから、大入りだったわけだ。しかも、この戦争劇が、守田勘弥を上流人に接近させる便宜を得させたのだった。

芝居人と紳士、学者との交際が対等になった。それは明治の諸政一新という御思召おぼしめしにより、四民平等の恩典に浴したためではあるが、西南戦争劇上演のために、薩南の事情を明らかにするには、当時の頭官に接近せざるを得ない。もとよりその機を望んでいた勘弥が、取り逃すようなことはしない。新富座主の豪遊する、木挽町の待合まちあいは、明治頭官の遊ぶところで、当時の待合のおかみ、芸妓げいしやたちは、お客の頭官を友達のように思っていたりする。勘弥とその人たちを結びつけた。

時は、洋行帰りの新人や、学者たちの間に、丁度演劇改良熱の勃興ぼつこうしつつあったおりで、勘弥はその機運をいちはやくも掴つかんだのだ。で、新富座本建築のときは、四十二軒あつた附属茶屋を、おお大茶屋の十六軒だけ残して、あとは中茶屋ちゆうちやも廃した。間口まぐちの広い、建築も立派な茶屋だけ残したのだから、華やかなはずだった。

つい十年ほど前の、旧幕時代には、芝居者は河原乞食いゝやと賤いやしめられ、編笠あみがさをかぶらなければ、市中を歩かせなかつたという。差別待遇が甚はなはだしかつたため、七代目団十郎（隠居えびぞうして海老蔵、白は猿くえんと号す）は、

錦着にしきて畳の上の乞食かな

と白もうしたほどのばからしさが、新富座開場式には、俳優の頭領市

川団十郎をはじめ、尾上菊五郎、市川左団次から以下、劇場関係者一同、フロックコートで整列し、来賓には、三条太政大臣^{だじょうだいじん}を筆頭に、高級官吏、民間名士、外国使臣たちまで招待したのだつた。

それからの新富座は、外賓接待には洩^もらされない場処^{ところ}となつて、ドイツ皇孫ヘンリー親王の来朝の時から、我国の宮殿^{みやでん}下方^{かた}もお揃^{そろ}いにて成らせられ、その時の接待係は、鍋島^{なべしま}、伊達^{だて}の大華族であり、そのあとへは香港^{ホンコン}の太守^{たいしゅ}、その次へは米国前大統領グラント將軍という順に、国賓たちを迎えた。

欧風熱は沸騰して、十二年の九月には、外国役者の一座、英、米、仏人混合の一座をかけたりましたが、言葉がわからないので一

般には不向きで不入りだったという、種々の経緯はあったが、新富座は劇道人の向上にはたいした役割をもった。その後、麻布鳥居坂とりいざかの井上邸で、天覧芝居という、破天荒の喜びをもつことになったのだ。

読者は、本文と、関係もなさそうなことを、なんで長々と書いているのだと、お思いになるかもしれない。この辺で、閑話休題と書くところなのだろうか、実はなかなか閑話休題どころではない。

明治十二、三年から、浜子の生れた十四年以降の、劇界の開展は、こんな時代だったのだが、すべての世の中も、またこんなふうな発展進歩の途をみちとっていた。新富座主が新機運をつか掴んだ機智

と並んで、劇界の大明星であつた、九世市川團十郎の人格、識見

—— 伝統的 おおだてもの 大立物の風格が、当時の学者、識者、貴顕たちに、

自分たちの うちがい 埒外の分野から同格者を見出した みいだ 欣びを以て よろこ 尊敬し

迎え入れられたことが見逃せ のが ない。団洲とよび、 さんしよう 二一升とよび、

ほりこし 堀越と呼び、友達づきあいの交わりを求め許した。そして、団

十郎以外にも、彼にならんで名人菊五郎のあることも知つた。

「勸進帳」その他が、明治天皇陛下、 あきのみや 皇后宮、皇太后の宮と、

天覧につづき たいらん 台覧になつたことは、劇界ばかりではない、諸芸

の刺戟 しげき になつたのだ。ことに、堀越家とは いんせき 姻戚に、荻原 おぎわら 浜子

の母方はなつてゐる。浜子が八歳の明治廿一年には、 すえまつせいひ 末松青

よう 萍氏たちの演劇改良の会が（末松氏は伊藤 ひろふみ 博文の婿）「演芸

「矯風会」に転身して、七月八日に発会式を、鹿鳴館ろくめいかんで催し、来賓は皇族方をはじめ一千余名の盛会で、団十郎氏令嬢の、実子じつこと扶貴子ふきこが、浜子とあまりちがわない年齢で、税所敦子さいしよあつこ——宮中女官かえてないし楓の内侍——の作詞を乞い、杵屋正次郎きねやしやうじろう 夫妻の節附ふしけ、父団十郎の振附けで踊っている。

ここに、見逃せない事實は、女性進展の機運が、著るしくみながら、ぎつて、こうした方面にも、立たてものの娘だからということばかりではなしに、女優というのが、なくてはならないと、たとえ泰西たいせいの模倣そのままでも、論じられていもしたので。

そんなことを細かく言っていたらば、一篇の、風俗史的な女性発展史になってしまうから、それこそ閑話休題であるが、面白い

のは、新富座が越して来て間もない、明治八年ごろの、築地風俗に、こんな日常時小話がある。

当時の新聞からとつて見ると、

雪の肌はだえに滴てきてき々たる水は白蓮びやくれんの露をおびたる有ありさま。

艶々つやつやしたる島田鬻しまだまげも少しとけかかり、自由自在に行きつ

もどりつして泳ぐさまは、竜たつの都おとひめの乙姫おとひめが、光氏みつうじを慕つ

て河に現じたり。また清姫きよひめが日高川ひだかがわへ飛びこんで、安あんち

珍ちんを追つたときはこんなものか、十七や十八で豪気なもの。

と、合引橋あいびきばしの泳ぎ場ばで、新富町の寄席よせ、内川亭うちかわにいる娘が泳

いでいたのを、別品女中べつぴんを連れて遊びおよに行く_{およ}と出ている。

それも無理のないのは、その辺、紅毛人こうもうじんの散歩場なのであ

るし、つい先ごろまでは、人中で肌などあらわすようなことは、死んでもしなないというふうになはしつけられていたのだから、白昼衆目の見る前で、島田の娘の水泳ぶりには、記者も驚いたのであろう。

だが、また、佃つくだじま島から、渡舟わたしでわたつて来た盆踊りは、この界隈かいわいの名物で、異境にある外国とつくにじん人たちを悦ばせもした。そうかと思えば、島原の芝居は炎暑で不入り、元金七千円金が、昨日あがの上り高だかでは千五百円の大損、それに引きかえて、同所の、火ひ除よけ地へ、毎夜出る麦湯むぎゆの店は百五十軒に過ぎ、氷水売は七十軒、その他の水菓子、甘酒、諸商人の出ること、晴夜せいやには、半はん宵しやうの物成高うりあげだか五百円位、きわめて景気よしともある。

なんと、蝦夷錦えぞにしきのように、さまざまな色彩の錯合ではないか

——それらの人々の頭の上を照らすのに、

美なるかな、明めいなる哉かな、街頭に瓦斯ガスランプ立つ。これで西洋の

市街に負けぬという見出しで、

美なるかなランプ、明あきらなるかなガスランプ、一度ひとたび点じ来て、

我々の街頭に建列するに及びてや、満街白昼の觀をなさしむ。

これに次ぐものはオイルランプなり、これまた一行人いちこうじんをし

て、手に提ちよう燈ちんを携ふの煩はんとわかれしむ。

といっている。新富座はもとより新設備を誇りにしている。当時

流行の尖せんたん花ガスは、花の形かたちをした鉄の輪の器具の上で、丁

度いま現今、台所用のガス焔こんろ炉のような具合に、青紫の火を吐いて、

美観を添え、見物をおったまげさせていたのだ。

そこで、この間^{かん}、明治四十年に至るまでには、新富座興亡史があり、歌舞伎座が出来上り、晩年は借財に苦しめられた守田勘弥^{もりたかんや}が歿^なくなってしまふと、新富座は子供芝居などで、からくも繋^{つな}いでいるような時もあった。

その新富座の茶屋丸五^{まるご}の二階。盛時を偲^{しの}ばせる大きな間口^{まぐち}と、広い二階をもったお茶屋が懇意^{こんい}なので、わたしは自作の「空華^{くうげ}」という踊りの地方^{じかた}の稽古^{けいこ}所に、この二階をかりてあてた。

試演は歌舞伎座で催すのだが、沢山の人を集めた和楽オーケストラなので、広い場所でなくっては稽古が出来ない。この丸五の二階で、幾日も幾日も、みんながお弁当を食べた。

主として箏ことをもつて、この歌劇風の「空華」の気分を出そうと
いう最初の試みなので、作曲者の鈴木鼓村氏は、私の母がいる箱
根へいって、頭を冷し、気分を統一して、そして漸ようやく出来あがつ
たのだった。

それを創意のまま鼓村さんが弾ひくのを、受取つてくれるのが浜
子であった。彼女は、一度聴いていて、膝ひざの上で右の薬指を軽く
打っているが、直じきに正確な譜にうつした。鼓村さんは弾いてしま
うと、その次には、例の、気分によって演奏の手がちがうのだつ
た。

すそ末の方へいって伴奏に三味線がはいるのを、ながうた長唄研精会の稀き
ねやわさぶろう音家和三郎が引きうけていた。少壮気鋭だった三味線楽家は、こ

の試みが愉快でならないのだが、そんなふうで、鼓村さんとは合せるたびに、ぴったりしていたのがそう行かなくなる。

箏ことの方の弾手ひきても多い。長唄三味線の方も多い。歌は、音蔵おとぞうという立唄たてうたいの人の妹で、おかねちゃんという、それは実に好い声の娘と——その人は惜しくも亡くなったが——その姉さんが主であつた。岡田八千代さんも箏の方を助けてくれた。

とにかく、私の友達は、この仕事にみんな手つだつてくれた。

踊りの方は市川猿之助が主役、女の方の主役は、堀越実子じつこ——市川翠扇すいせんという女優の名で出演し、七人ななたりの舞女ぶじよは、そのころの新橋七人組といわれた、小夜子さよこ、老松おいまつ、秀千代ひでちよ、太郎おとまる、音丸ねまる、栄竜えいりゆう、たちだ。この組はこの組で、浅草千束町せんぞくちようの市川段

四郎氏自宅の舞台と、歌舞伎座案内所の表二階とで稽古けいこしていた。

楽座の方は、曲の打合せが重なるほど、面白い出来ごとがあつた。とうとう、ある日、箏と三味線の正面衝突となつて、和三郎がカンカンに怒り出す。鼓村さんは、幾杯もコップの水を呑んだが、それでも熱して、そら豆のゆでたのを盛つた大どんぶりのか
らになつたのに、これに水をくれといつて、水が運ばれた来たのも知らずに弾いていたが、

——そんなこというて、わしやあ——

と、言うが早いか、どんぶりの水を口にもつてゆかずに、一、二分ぶぶ蒞りの赤い熱にえあたま頭の上へ、ごごんだまま、ザブツとぶっかけてしまった。

箏の上である。夕立ちのように水は落ちた。それも知らないで彼は熱中している。和三郎は小腕をまくって、ブルブル慄えながら、冷静をとりもどそうとして、煙管キセルに火を点けたが、のぼせているので火皿ほざらの方を口へもっていった。

みんな、座中のものは、びっくりしたように、おかしさもおかししではあるが、気の毒さで押だまってしまったていた。

と、その時、その騒ぎと引き離れて、膝ひざの上に箏ことじり尻を乗せ、片手で懐紙に書いた譜を見ながら弾きだしたのは浜子だった。彼女は、喧嘩けんかには捲まきこまれず、両方の言い分をきいて、両方の譜を、その争いのなかからうつしとって、合うように接合してしまっていた。

浜子が弾きだすと、和三郎は煙草を止め、鼓村も弾く手を伏せて聴いた。

「あ！ それなら好い」

そう叫んだのは和三郎だ。

「ああ、そや、そや。なんじや、それじやったわい。」

と、鼓村さんも叫んだ。

みんなの顔に、ホツとしたくつろぎが浮び、同時に誰も彼もの笑いが爆発した。

「なんのこつた。」

と、^{つぶや}呟きながら、和三郎は三味線をとって、浜子の方へ、せわしなくむき直った。鼓村さんは、例の首をひっこめて、きまりわる

そうに、箏にかかった水の始末を、弟子たちにしてもらった。

みんなが、急に景気よく、しゃべったり笑ったり、やゆ擲揄したりするなかで、浜子だけは、別天地にいる人のように、すこしも動揺されず、直に最後まで完全につくりあげてしまった。

「ほんのことというと、まだよう、まとまっていなかったのじゃ。」

鼓村さんは、自分だけでなら、どんなふうにも弾けるので、癖になつてしまつて、困ると自分でこぼして、かるがる気持ち軽々したように、

「浜子さん、有難う有難う、助かったわい。」
と機嫌よく言った。

その時、わたしは、浜子は、ひっこみ思案なのだが、大きなも

のの作曲も出来ると信じた。

千束町の喜熨斗きのし氏の舞台へ、私と、浜子と鼓村さんと翠扇さん
とが集った時、猿之助役の大臣おとどの夢の賤夫しずのおと、翠扇役の夢に王
妃となる奴婢みずしめとが、水みず辺のほとりに出逢うところの打合せをした。
猿之助の父は段四郎で踊りで名の知れた人、母のこと女じよは花柳はなやぎ
初代なとりの名取で、厳しくしこまれた踊りの上手じょうず。この二人が息子
のために舞台前に頑張がんばっている。鼓村さんは息子が踊りで叱しかられ
るのまでハラハラして、その方へ気をつかうので、琴柱ことじをはねと
ばしたりした。

「おや、おや、どうも。この方が乱れて——」
と、温厚な段四郎は、微笑しながら飛んだ琴柱を拾いに立った。

可愛らしい鼓村は、大きな、入道にゆうどうのような体で恐縮し、間違えると子供が石盤せきばんの字を消すように、箏いとの絃いとの上を掌てのひらで拭き消すようにする。

浜子の方に狂いはない。その日の帰りに、千束町を出ると夜暗よやみの空に、真赤な靄もやがたちこめて、兀然こつぜんと立ちそびえている塔が見えた。

「あれは、なんだろう。」

私は、すこしぼんやりしていて、見詰めて立ちどまった。

「公園裏の方にあたるから——十二階でしょうよ。」

「ああ、凌雲閣りょううんかく？」

まあ、なんて綺麗なのだろうと、二人は夜の、浅草公園の裏か

ら見る、思いがけない美観に見とれた。

——楽劇「浦島うらしま」！

私の頭のなかに、いつか手をつけて見たい、大きな望みがその時、かすめて過ぎた。

楽劇「浦島」の一部分上演を、坪内先生から許されたのは、それから二、三年のち後だった。

浦島は六代目菊五郎、狂言座第一回を帝劇で開催するときだった。

作には、箏ことの指定はないのだ。各種の三味線楽と、雅楽類だったのだが、私は、おゆるしをうけて、浜子の箏を主にして、三味線は一中いちちゅうぶし節の新人西山吟ぎんぺい平、雅楽は山之井やまのい氏一派にお願い

いしようとした。

だが、なんといつても箏の浜子を説きおとすことが一番の難関なのだ。

わたしはぶらりと行つて、なんでもないような顔をして、彼女を散歩に引き出した。伊勢山いせやまの太神宮たいじんぐうの見晴しに腰をかけた。

「何をそんなに眺めているの。」

「海を。」

彼女は、何かわたしが計画たくらんでいるなど見破っていた。わたしが突然に行つて、歩こうなぞということから例外すぎるのだつたから。

「海なら、佃つくだからでも、あたしの宅うちの座敷から見えるのに。」

「うん、でも、歩いて見たかったの、芒^{のげむら}村から、横浜新^{しんでん}田を眺めた、昔の絵が実によかったものだから。」

そんなことつけたりで、先^{さつき}刻、横浜駅前^{さくらのぎちよう}の（現今の桜木町駅）鉄^{かね}の橋を横に見て、いつも^{おのえちよう}の通り、尾上町の方へ出ようとする河岸^{かしか}つぷちを通ると、薄^{はつか}荷を製造している薄^{はつか}荷の香^{にお}いが、爽^そ快^{うかい}に鼻^{はな}をひっこすつた、あのスツとした香^かを思いだして、私は一^{いっ}気に言^いつた。

「坪内先生の浦島ね、竜宮のところだけ、作曲してもらいたいの。」

「だめ、だめ。」

浜子は強い近眼鏡を光らして、呆^{あき}れたように、

「あなたは、あたしを買いかぶりすぎている。」

「いいえ、臆病だとさえ思っている。他の人は、七、八分もつた才能を、十二分にまで見せている。浜子さんは、十二分にもつてゐるものを、一、二分しか見せない。それも、よんどころない時だけにね、けちんぼ。」

それつきりで、二人は黙りあつて、いつまでも腰をかけていた。日が暮れかかると、どっちからともなく立って歩きだしたが、口はきかない。

日はすっかり暮れかけていた。黙ってさきへ立つて、浜子が導びいた広間のうちは、一層たそがれの色が濃かった。

浜子は、壁によせて立ててある「吹上げふきあ」という銘なのある箏ことに手をかけていた。「吹上げ」の十三本の絃いとの白いのが、ほのかに、滝が懸かったように見えている。

吹上げの浜の白しらぎく

さしぐしの夕月に――

とか、なんとか、わたしが即興詩を与えたことがあったが、その、朝と夕べとの小曲の作曲が、どうも気に入らないといって、どうしても聴かせてくれないので、わたしも、その歌を忘れてしまっている箏だった。

浜子は言った。

「調子は？」

それは、やるともやらないとも、返事を口にしないが、たしかに「浦島」の作曲についていつているに違いなかった。

「変えなければいけないでしょう、今までになかったのもよろしい。そして、音を複雑にするために、高いのと低いのがほしい。以前からある替手かえてというものとは違った意味で——」

箏の調子を低くしろということは、これは凡手ほんしゆには言えないことだ。限りのある柱しらのおきかたであるから、低くするには、絃いとの張りかたをゆるめるよりほか手はない。してまた、ゆるめた絃は最も弾ひきにくいのだ。第一、爪音つまおとが出ない、下手へたに強く爪つまを

あてれば柱が動き出す。

「莊重な音を出す工夫は——」

鼓村師の独特の爪でなければ——だが、鼓村師のはまた格別な品だ。象牙の、丸味のある、外側を利用して、裂断た面の方に、幾分のくぼみを入れ、外側は、ほとんど丸味のあるままで、そして、爪さきの厚味は四分もあるかと思われる、厚い、大きな爪だ。それなればこそ、撫でるような、柔らかな、霰のたばしるような、怒濤のくるような響き——あの幽玄さはちよつと、再び耳にし得ない音色だった。

「あああれは、あの人でなければ出来ない。」

そうはいったが、浜子も、その事も考えてもいたのだ。

「この音色で、非力なわたくしの爪音が、どこまで達しるかしら。」

充分に、絃と、柱との融合を計ったうえ、浜子は研究の態度でいった。やれるかやれないかは、この、音の響きひとつであるという真剣さが溢れていた。

私は、縁側の障子を開いた。高みから見る横浜関内の、街々の灯は華のようにちらめいて、海の方にも碇泊船の燈影が星のようにあった。次の間の境をあけると、家の人たちは、二人でむつつり帰って来て、燈もつけない室で、箏をとり出して、弾くだけでもなく、何かもずもずやっているのです、何ごとかと案じていたように、そつと来て様子を見ていた。

「こんど、菊五郎と、狂言座という研究劇団のを組織して、帝劇で、坪内先生の楽劇『浦島』をやらせて頂けるので、浜子さんに、箏を引受けてもらいたいので——」

と、私は説明して、

「やつてもらえるか、もらえないか。この音が、何処どこまで響くか——出来る出来ないより、きこえないようなものが弾いたつてしやうがないというのです。」

そう言い足すと、浜子は、その通りというように、絃に触れながら、頷うなずいた。

浜子のお母さんほど好いい人はない。そして、浜子の養子さんの賢けんご吾さんもまた、それに劣せらずよい人で、浜子の芸術に尊敬をも

っている。

お母さんは奥深い土蔵くら前に陣どり、賢吾さんや、女中たちは、
外おもてへ飛出した。坂の下へいつたり、邸の裏へ廻ったり、ずっとさ
きの角かどまで行ったりして、只ただいま今は低く、只今のはハッキリと聴
えたと、幾返りか報告した。

聴えないというものはない。箏の音とは、はつきりわかりませ
ぬが、響きはきこえましたと、ずっと、さきの方へいったものま
でが知らせた。浜子は、ほ、ほ、とそれが例の、こごむようにし
て笑って、

「あなたへの同情は、素晴らしいものだ。」

それが、では、やりましようという、返事のかわりなのである。

「まあ、まあ、まあ。そうでございますか、浜さんが、やると申しましたか？」

顔中が、笑まいでくずれそうにいう母御へむかつて、

「あなた方は、おやつちゃんが出来たときから、氣持に縛られてしまっていたのですよ。」

と、もう彼女は、楽劇「浦島」の初版本を出して来て、わたしのと突きあわしている。

改めて私は、もう一度、一番低い音をきかせてもらった。

「この絃を、もう三本か五本足して、箏の丈を、もう一尺ばかり長くして見ようか。」

私の空想は飛拍子もないことを言い出す。と、浜子は咄嗟に、

「わたしというものを、生み直させなければ、それは不可能でしょう。」

彼女はクツクツ、おかしそうに、機嫌よく笑っている。わたしは、人並より小さな彼女を見直していった。

「しようがないな。」

「ほんとにしようがない。これで勘弁しといってもらいましょう。」

大正三年の二月、狂言座は、夏目漱石、佐佐木信綱のぶつな、森鷗外、

坪内逍遙しょうよう、という大先輩の御後援をいただいて、鷗外先生は

新たに「曾我兄弟そがきょうだい」をお書き下さるし、坪内先生は、「浦島」

の中之段だけ、めちやくちやにいじるのを御寛容くださるし、松まつかいつかいきゆうきゆう

岡映丘氏は、後景はいけい、衣装を全部引きうけ、仲間になって下

さった。これは、前回に書いた舞踊研究会の「空華くわげ」の時、松岡さんと、私の好みと、鈴木鼓村さんの箏そうきよく曲とがぴったりしたので、松岡さんが進んで会員となられたのだが、今度は、その松岡さんが随分お瘡かんしゃく癩いで、日文ひふみ、矢ぶみで、わかるのは君だけだろうという詰問状がぞくぞくと来た。ずっと後のちになつてから、「わたしも年をとつたから、もう瘡癩はおこさないが、時雨しぐれさんの瘡癩もたいしたもんだ。」

なぞといわれたが、過日、『源氏物語』劇化について、随分お骨折なされたにもかかわらず、良い結果を見なかつたあとで、氏の顔を見た時に、当局の許可不許可にかかわらず、芝居道というものがどんなもので、瘡癩を起してもどうもならないということ

を、さぞ不味ふみにお味あじわいになったことも多かつたろう、当年の疝癩ぜんらんなど、芸術家としての疝癩ぜんらんで、むしろ、思出は悪くないと思つた。が、そういう大規模の中な幕なま「浦島」の竜宮での歓楽と、乙姫との別れの舞踊劇は、浦島の冠かむりものとか、履くつとかあまりに（奈良朝期の）実物通りによく出来たので、首が動かせずさすがの菊五郎も踊れなくなつてしまつたりして、箏の作曲の評判はすばらしくよかつた。

*

「浜子さん、あなたは、自分の箏を、もっと生かして見る気はない。」

病弱であつた私は、何かしら、精一ぱいのことをしていなければ

ば、生きてゐる気のしない気質たちだったので、からだ軀の弱い彼女に、生きてゐるかぎり、力一ぱいのものを残させたい気がして、ある日、差向いでいるときに言つた。

「それは、願うことだけれど、——出来るかどうか。」

そんなこんなで、彼女の箏曲を聴いてもらう会をつくるようになった。こうじまち 麹町区 ゆうらくくちよう 有楽町の保険協会の地下室の樂堂で、大正九年に開催したのがはじめで、震災の年まで三回つづいた。私は文壇の人に主おもにお出いでを願つた。

浜子は、彼女の耳で、彼女の心で、鈴木鼓村の箏曲を認め師事したが、彼女はいちはやくも、朝鮮から帰り、上京したての宮城みやぎ道雄みちおを若き天才と許していた。であるから、この浜子の箏を聴く

会の、第一回だか二回目だったかの時、宮城氏に助演を乞うて、

「唐からぎぬた砧」のうちあわせは、真に聴きものだった。会が終ると、

彼女は眼の暗い宮城氏の手をとって、それは実に幸福そうに自動車へ導いていった。そして、花束を傍かたわらにおきそのまま宮城氏を送っていった。

浜子を主席にした卓テーブルへ帰つて来たときの彼女は、実に生いきいき々して、はじめて見せる顔だった。まさに、この時分の彼女の爪つま音おとには、彼女の細い腕から出るものではない大きな、ふくみのある、深い、幅の広い音が出ていた。

「浜子は巧うまい。」

「浜子さんの箏は好いいなあ。」

何処でも好い評判だ。

菊五郎の、芝公園の家では、なんでも、しんみりと、浜子と宮城氏との合せものを聴きたいというので、ある夜、その会合があった。実際、あんな好い気持のものを聴く機会はそうあるものではない。と、今でも思出すほど、宮城氏の三絃と浜子の箏とが、流れる水のように、合し、むせび、本流となり、あるいは澱む深味へ風が過ぎてゆくようになったりする音色は、曲が止んでも、弾いたものも聴くものも、消えてゆく、去りゆく音を追って、すぐ、果敢なくも思出となってしまう脆さを、惜しむ思いにホロホロとする気持に浸っていた。

朱絃舎——そんな名を選んだのも、その時分のことだった。

「朱絃」という名の定まるまでには、どんなにさまざまの名がえらまれたか知れない。私の大形ブックの幾頁ページかも、古い詩句の中から、およそ、これはと眼にとまり、心にとまるものを抜きだして、書いておいたか知れないのだった。

前にも書いたかも知れないが、彼女が、何処か『源氏物語』のなかの、明石あかしの上うえに似ているので——氣質もそうであれば、箏の名手でありながら、我から聴かそうとは決してしない。それに、容きりよう貌も立ちまさっているのではないが、人柄が立ちまさって見える点など、私は、彼女にそんな事をいったこともある。彼女もその評は、嬉しくないこともなかったのだ。そしてまた、彼女の趣味も、その精神おおねは、王朝時代のものであった。私は、もちっと

古く遡さかのぼつて、もつとずっと、今日こんにちよりも新らしくと言うので、
ともするとくいちがうのだが、「朱絃」は、ともかく納まった。
彼女の門下はみな、朱絃——朱あかい絃いとの十三絃をもちいることにし
た。

覚悟はよいか？ そんなことばではないが、私は時おり、もはや、後退してはならないと、生活に余裕のありすぎる彼女に、回避的になりがちな用心癖を警戒した。が、それほど熾しれつ烈に、芸術的良心をもたぬ人々の間には、彼女が軌道に乗って、乗りだしてゆくのが不安にもなった。古い側の人の悦びは、困らない奥さんの芸であつて、名人だとされればそれだけでよいというようなところもあつた。また、あまり彼女を惜みすぎて、名物茶入れのよ

うに箱に入れて、あんまり人目に触れさせないのを、もつとも高貴であると考えるものも出来てきた。

彼女は私にむかつて、若い夫人をもつて、物質のためにいらいらしていた鼓村さんのことを、よく、こんなふうにいっただ。

「鼓村さんが、盲目になったら、どんなに名人になるだろうに。」と、わたしはすぐ、

「浜子のうちが金持ちでなくなると、どんなにこの人は好よくなるかshれないだろう。」

その時分のことだった。市川猿之助が、明治座で、「虫」という新舞踊を上演したいが、尺八と箏でやって見たいと相談をうけた。「空くうげ華」の時のこともあるし、箏は浜子に頼みたいといった。

オー・イエス！ 私は嬉しく心楽しいとき、よくこんなことをいう。猿之助もよく踊らせた。それに、劇場で、箏を主とし、しかも、あの、芸術的香気の高い、いわゆるお賑にぎやかなケレンの多くない、まことに、どっちかといえば手のこまない、一本一本絃いとの音をよく聴かせようとする、テンポの早くない箏を、用いさせようというのには、よほど劇場当事者によい印象を与えていることを思わなければならぬ。これは、真の箏曲というものを、一般に認識させる上に、非常な良好な機会だと思った。しかし、また、冷静に考えて、「虫」であるというには、尺八ふえが主になることもあり得べきことだが、尺八ふえばかりではまとめゆけないから、ある部分は尺八ふえに譲つても、結局箏を主にすることになる

考えた。

猿之助も、その間の^{かん}ことはよく知っている。

「浜子さんをお願いする以上、あの方の芸術、あの方を、いわゆる芸人あつかいには決してしません。あの方が、好意をもつて出てくださいることを、『虫』は別番附^{べつばんづけ}にしますから、あの方の待遇は別に御出演下さる口^{こうじょう}上^{じょう}を書いて添えます。座方^{ざかた}からも、決して失礼のないように、楽座の席も別につくらせます。それでいけなければ、作曲して下さるだけでもよいから。」

私は、猿之助の気持を嬉しいと思つた。そこまでに事を運び、主張を通すのは、なかなか誠意でなければ出来ない。

「さあ、浜子さん、作曲してあげるかあげないか、出演は第二の

問題。」

と、私は厳きつく言った。なぜなら、この位な皮切りをした方が、彼女をお道楽芸にしておこうとするものへの、決戦的な——といおうか、大切はれにしている腫ものへの大手術だと思つたからだつた。

ともあれ、その稽古所と、打合せの場処をつくらなければならぬ。私が、佃つくだしま島しまの家うちにいたし、新あらたに、母の住むようになった、鶴見つるみの丘かみの方うちの家うちにいたし、佃しま島しまでは出入りに不便でもあるので、小石川に大きな邸なくをもつて、会計検査院ごに出でていたお父さんが歿なくなり、家督ごの弟御ごが役の都合で地方ごにいるので、広い構えのなかに、ポツンと独りで暮くしている、若い時分は、詩文と、名筆で知られていた、浜節子という、これも浜

子の古い仲良し友達で、朱絃舎の一員である人の、邸の表広間を借りることにした。

で、便次ついでに、朱絃舎の門弟といえ、浜子の箏の耽美者たんびしやである、最も近い仲の人たちばかりだった。それらが密接なつながりで垣かきをつくり、師の芸を盗むどころか、師の芸は伝えられないものとしてあがめている。この、浜節子さんは、年少のころから片上かたかみのぶる伸氏たちを友人にもっていたような、浜子には学問の友達である。彼女が泊りがけで、箏の稽古に横浜まで来る時には、りの字のようにふとんを敷くのだと笑った。節子さんは娘時代には、一反半たんなくては、長い袖そでがとれなかったという脊高せいたかのつぼ、浜子は十貫にはどうしてもならなかったか細ほそい小さな体だった。

私の妹の春子も、泊り込みの通い弟子で、浜子のお母さんからは料理、浜子からは箏を、ずっと教えてもらっていた。

春のお魚は鯖さかなさわら、ひらめ、などと、ノートさせられて「今日午後六時の汽車にて帰す」と浜子が書き添え、認印みとめを押してよこした年少のころ、浜子の母ははびと人はホクホクして、

「なんて可愛い、おとなしい子なのだろう。」
 というと、浜子は、

「おしやま猫が、いつまで猫をかぶるかしら。」
 と笑ったりした。その春子も成人して、ぐつと逞たくましくなってしまう
 っていた時、「虫」の作曲の顔寄せがあったのだった。

金屏きんびようの前に、紫檀したんの台に古銅こどうの筒の花器はないれ、早い夏菊の白

が、みずみずしく青い葉に水をあげていた。深い軒に、若葉がさして、枝の間から空は澄んで見えた時節だった。好い毛氈もうせんの上に幾面かの箏が出されてある。猿之助は、黒の紋附きの羽織はかまに袴をつけて、

「荻原おぎわらさん、聴入れて頂きまして、ありがとうございます。」と、手をついていった。浜子も丁寧におじぎをかえした。

であるから、いかなる異変があつても、この約束は破れないと私は信じた。が、遅れてはいつて来た春子は、いかにも腹が立つように、苛いらいら々そこらを歩いて、唾つばを吐いたりした。猿之助は帰つたあとで、尺八の方の人が残っていたが、それも帰ると、浜子の芸術げいゆつを冒瀆ぼうとくするということを、彼女は雄弁いさに泣いて諭めた。

これは、春子を通して、浜子の周囲一同の代弁であったのかもしれなかった。後あとから来た浜子の手紙でも知れた。私は、それを無理とは思わないが、世間見ずな思い上りだと思った。若い猿之助の悲憤を思いやった。慰めようもない思いでわびた。そのかわりに違約の責せめをひいて、私は浜子と絶交すると言った。

猿之助からの返事は、小しょうせい生せいゆえに、長い友達と絶交してくれるなどいうのだった。

私は、以前まえから箏曲では「那須野なすの」が、すこしの手も入れないで、あのまま踊になるということをいつも言っていた。それで故おのええいざぶろう尾上栄三郎おのええいざぶろうが「踏影会とうえいかい」を市川男女蔵おめぞうとつくった時に、浜子の地じで上演したことがある。芒すすきすらあまり生はえない、古塚の中か

ら、真白まつしろの褂うちぎを着て、九尾きゅうびに見える、薄黄はくわうの長い袴たまもで玉藻たまもの前まえが現まわれるそれが、好評であつたので、後に、歌舞伎座で、菊五郎が上演しようとし、地の箏そうは朱絃舎浜子にと、随分と望み、浜子もその心持でいたのだが、その実現は見なかつた。

ともあれ、箏そう曲きよくの劇壇への進出は、朱絃舎浜子を嚆こう矢しとする。

*

大正五年世界大戦の余波は、我国の経済界をも動揺させた。横浜開港の時から生糸商、野沢屋の七十四銀行の取附けとなり遂に倒産した。

浜子うちの家では、当主賢吾けんご氏が、子飼こがいから野沢屋の店に育つたの

で、生糸店とは別会社の、他の重役たちのように策を施さなかつたので、父親譲りの財産は、無償働らきのようにお店へかえしたとおなじことになって、預金はそのままになってしまった。しかも、浜子の父平兵衛へいべえが、長い間支配人として、どんなに店を富ませたか知れないので、莫大ばくだいもない慰勞金が分けられることになつたまま、父親が死に、主家の主人が二代つづいて死んだので、そのままになつていたのも、取らずじまいになつてしまつた。

「金持ちなんて、それは間違いだけれど、品物だけはどうかこうにか、あるにはある。」

と、浜子はいつていたが、名物ものや、美術品などはさほどでないとしても、横浜開港時に手に入れた舶来品が、忘れてしまうほ

どあつたのだ。切子きりこの壺つぼばかりも、好いのが沢山あつた。古い洋酒が、土蔵くらの縁の下にコロコロしていて、長持ながもちの中は、合紙あいがみがわりに、信州から来る真綿まわたがまるめて、ギツシリ押込んであり、おなじような柄の大島がすがすが、巻いたままで、幾本もはいつていて忘れたというふうであつた。

「おやつちゃんに見せたことあるかしら、光琳こうりんの蒔絵まきえの重箱を」。

と、いうと、賢吾氏が、二十五歳にもなるが、そんなのは私も見たことがないというようであつた。

炭すみは、土蔵くらの縁の下にも住居すまいの下にも、湿しけないようにと堅かた炭すみが一ぱい入れてあるといった家で、浜子うち一代は、どんなこと

があつても家に手を入れないですむようにと、壁の中にも鉄棒のしんの入れてある念入りの普請ふしんを、父親は残しておいた。それらはみんな、大正十二年の震火災であともなくなつてしまつた。

「外国の保険だの、外国の銀行にあつたものだのが、かえつて、こつちでは、わからなくなつてしまつても、ポツポツ先方むこうから知らせてくれて。」

と、彼女は言つた。身をもつて逃のがれて、路で草履ぞうりを拾つて母にはかしたといつたほど、何もかも失つてしまつたが、秩序が回復すると、私たちにくらべれば、やっぱり閑のどかに暮してゆける人だつた。

「お店がああなつて、横浜にいなくつて好いのだから、東京へ来

るのに、家を売ろうかと思つているうちに——」

邸は震火に失つてしまつたのだ。彼女はあんまり用心深かつたことがいけなかつたといつた。一ツひとつ、思出の深い箏も、みんな焼いてしまつたが、思いがけない悦びは、芝の寺島（菊五郎家）氏から、衣類をもつて見舞いにいつた者が、家でも角の土蔵は焼けたが、母屋や、奥蔵が残つてといつて、お預りしてある箏も無事ですといつた。

「おお、『若草』が——」

彼女は、すぐにも、『若草』という箏の絃に触れて見たい衝動を、おさえられなかつたほどだつた。

数日の後、荻原一家は、神奈川台の島津春子刀自の家とじにいた。

この人も長い間の、年長の友達であつた。そして、小石川の浜節子の邸に落着いた。

これも、友達である三菱みつびしの莊しょうだ田た氏の令嬢である宮田夫人が、うしごめよちようまち牛込余丁町うしごめよちようまちの邸の隣地に、朱絃舎の門標を出させる家を造つてくれた。門をはいるとすぐ雷神木らいじんぼくがあるのを、私が、坪内先生の御邸内おやしきないに建つた文芸協会へ誘つていつた時に、その木が、お住居すまいの門のすぐそばにある事を話したことがあつたので、浜子は、すくなからぬ奇縁のように悦んだ。

そのころ、坪内先生のお宅は、以前もとの文芸協会のあつた方に建つて、古いお住居や、お庭や、畑の方は莊田家で買ひとり、小路こみちも新しくついていたが、まだ、先生のお家うちと朱絃舎の間には、空あ

地きちがあつて、大きな樹きが二、三本残つている。その樹の下のあたりで、浜子は坪内先生と行きあつた。

彼女ももうだいぶんもとつたし、震災にもあつたりして、気が練れて来たので、

「あたくしは、狂言座で、『浦島』を作曲させて頂きました、荻原浜子でございます。」

と名乗りかけた。

「それは珍しいお方にあつた。」

と、晩年の、坪内老博士は大層よろこばれたといつた。お話は尽きなかつたのであろう、その後で、例年のように届けてくれる、

小田原おだわらの道どうりょう了らうさまのお山から取りよせる栗くりでつくつたお赤飯

を、母が先生にも差上げたいといったから、持参してお話をして来たと、感慨深そうにした。

菊五郎門下の「菊葉会」きくようかいに、九条武子さんの作、四季のうちの「秋」に作曲したが、長安ちやうあん一片いっぺんの月、万戸衣ばんこを擣うつの声：
 …の、あの有名な唐詩の意味をよく作曲しだして、これはまとも
 った、情景そなわる名曲となった。私は、「虫」以来、彼女の作
 曲について遠ざかっていたが、「秋」の出来栄ばえをききにきてくれ
 といわれ、出来がよかったので嬉しかった。

彼女は、近年ほんねんは殆ど、高橋元子もとこ（藤間勘素娥ふしまかんそが）の舞踊茂登女会もとめかい
 に出演し、作曲していた。元子のお母さん姉きょうだい妹まいも、浜子の友
 だちだった。元子も朱絃舎門下で、浜子の晩年の日記は、元子を

恋人とさえ呼んでいたが、育ちゆく人々は、いつまでも彼女の秘蔵弟子、愛いとしい人形ではいかなかったから、彼女は怏おう々おうと楽しまない日がつづいて、そのうちに坪内先生のお棺ひつぎを送り、すぐまた、五十余年を、一日も傍かたわらを離れなかった、浜子の老母が、ほくりと、それこそほくりと、早朝あさ顔を洗いながら、臥床ふしどから離れる娘へ、「羽織をひっかけないと寒いよ。」と世話をやきながら、そのまま、うつぶして、娘と一緒に生涯を終ってしまった。

それからの浜子、さびしそうだった浜子、来年は箏を弾いてから五十年になるから、祝いをしたいと思うといつて来た浜子。小閑を得て訪おもずれると、二階へともなつて、箏を沢山たてた、小間こま

の机の前でこういった。

「此処へ、上つて、作曲するだけが楽しみであり、生きている気がする。」

彼女の研究は、古楽こがくに、洋楽に、学問の方もますます深まつて
いるようだった。何か素晴らしい作ものを与えて、彼女の沈みきつた心
の灯ひを掻かきたてなければならぬ——

私がそう思った眼を見て、彼女は嬉しそうに、青い絃を張つた
箏をとりだした。

「これが、いつぞやお話したかないのとのかみ金井能登守の作の箏。」

震災に、頭だけ、うつすら火をかぶつたのを、名作と知らぬ持
主が、売に出したものであろう、手に入れてよく調べると、胴の

真ん中に銘があつたのだ。

「能登守の作は、二面しか残っていないという記録があるから、そのうちのこれは一面です。好いあんばいに、天人の彫りは無事で、焦げた箇所は波形だけですが、その波形は彫でなくつて、みんな、薄い板が組み合せてあるのです。」

その手のこんだ細工の波がたは、箏の縁を、すつかりとりかこんでいるのだった。彼女はこの箏に「青海波」の名を与え、青い絃を懸けた。

「この箏で、五十年の祝いには弾こうと思う。鼓村さん（那智俊宣）が、放送したのもこれ、赤坂三会堂で演奏会を催して、

この箏について説明をして、巻物にして書いておくといい

だが、そのままになつてしまつて——」

京都へ行つてから、鼓村さんは絵の方を主にして、那智俊宣と名が變つていた。この古箏こそうの歴史についても委くわしかつたのであるが、それよりも、私は、なんとなくいやな予感がした。鼓村さんは、間もなく歿なくなつてゐるのだ。

関東における、八ツ橋流や はしを預つてゐる彼女の、含蓄のある真伎倆を、も一度昂揚こうようさせるために、よい作を選び、彼女の弾箏五十年の祝賀にそなえたいと思つうちに、彼女も亡母なきははによばれたように大急ぎでこの世を去つてしまつた。

病床についたある日、眼ざめていうには、

「お母さんが来て、お乳を飲めといつてあやした。」

彼女は赤んぼにかえつて、母の懐ふところにねむった夢を見たのだ、そして、間もなく逝いつてしまった。

形見の名箏と、名剣を守つて、賢吾氏が一人さびしく朱絃舎の門標のある家に残つて見ると、彼女が娘であつて、わたしが陸奥みちのくの山里にいたころ、毎日毎日、歌日記をよこしてくれて、ある日、早い萩はぎの花を封じこめ、一枚の写真を添えて、この男を、亡父ちちが、養子に見立てておいたのですが——といつてよこしたことを思出す。

あなたの亡父おとうさんが、あなたのために考えておいたことなら、きつと、あなたがたを、良くお世話してくださるでしょう。

私はたしかにそう答えたのを覚えていて、今は、白髪になつた

人の孤影を、お気の毒に見守るばかりだ。病弱な浜子とは、殆ど^{ほとん}夫婦関係ということなしに、よく仕えいたわられた。

死ぬ前に、彼女はこういったという。

「こんど、大阪へ演奏にいったら、私がプランをたてて、大和めぐりに行きましょう。」

養子として、長い奉仕への、それがお礼心であつたのであろう。立てなくなつてからも、張りかえをする障子へ、めしと、一ぱいに書いて、御酒肴^{おんさけさかな}アリとつけたし、へへののもへじと、おかしな顔を描いた。慰安の旅行も果さないで先立つということをしな、とぼけたやりかたで、謝^わびていたものでもあつたらう。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「婦人公論」

1938（昭和13）年5～7月

初出：「婦人公論」

1938（昭和13）年5～7月

入力：門田裕志

校正：川山隆

2007年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

朱絃舎浜子

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>